

R6年度 自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制(委員会・組織等)

基幹教育センター
(責任者名) 大泉 常長
(役職名) 基幹教育センター長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	全学必修科目として実施し、単位修得率は97.5%となった。 また、演習課題の回答状況については、一部学生において遅れがあったものの、最終的には単位修得学生においてはすべての演習課題を回答した。
学修成果	学修成果等アンケートの結果を見ると、経営法学部においては、DPIに基づく全24項目の学習目標のうち、本プログラムに関連する「多様性の尊重」は全体で1番目、「広い視野からの理解」は14番目、「変化と備えるべき能力の理解」は11番目、「数量的スキル」は16番目という結果になった。 看護学部においては、DPIに基づく全20項目の学習目標のうち、本プログラムに関連する「人間と社会、自然への理解」は全体で3番目、「科学的判断の理解」は全体で18番目、「課題解決力」は全体で13番目という結果になった。 数理・データサイエンス・AIに関する知識の必要性についてはある程度理解が進んだものの、自身のスキルや科学的思考に関しては自信がない状況であることが読み取れ、この結果を踏まえ改善を行っていく必要があることを確認し
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	授業改善アンケートの「この授業の内容を理解しましたか。」について、青森中央学院大学経営法学部における「データサイエンス・AI基礎」では、そう思う・まあそう思う(全選択肢: そう思う・まあそう思う・あまりそう思わない・そう思わない)の割合が75.4% 青森中央学院大学看護学部における「情報処理Ⅰ」では、そう思う・まあそう思う(全選択肢: そう思う・まあそう思う・あまりそう思わない・そう思わない)の割合が85.0%であった。 いずれも同セメスターの全科目の平均値と比較して低い状況であり、数理・データサイエンス・AI教育の授業における難易度設定について改善が必要であることを確認した。 またアンケートの自由記述をみると、「結構面白いと思えた」「今の時代に合ったAIの解説やネット社会で使える技術と知識を知ることができた」など、一部の学生においては、本プログラムの受講により、数理・データサイエンス・AIに興味をもったという意見もあった。全学必修科目として実施していることにより、初めは興味がなくとも本プログラムに興味を持つきっかけになった学生がいたという点で、有意義な取り組みだと評価できる。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	本学では、全学必修科目として実施しているため、推奨の度合いによって履修者に変化はないが、授業改善アンケートの結果を基幹教育センターで分析し、後輩学生の授業時に修得に対するモチベーション向上の観点からも授業改善を検討している。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	本教育プログラムを構成する科目「データサイエンス・AI基礎」については令和6年度から経営法学部において必修としており、履修者数、履修率の向上を推進している。また、「情報処理Ⅰ」については、平成26年度から看護学部において必修としており、履修者数、履修率の向上を推進している。なお、「データサイエンス・AI基礎」については令和7年度から看護学部においても必修とすることが決定している。
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	R6年度から実施しているプログラムであるため、本教育プログラムの修了者が今後本学を卒業した後に、卒業生アンケートなどを通じて進路、活躍状況、企業などの評価を把握する予定である。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	令和6年12月7日(土)に、青森中央学院大学・青森中央短期大学主催令和6年度「数理・データサイエンス・AI教育に関する取り組み事例研究会」を実施し、教育プログラムの講義内容および実データを活用した演習などの手法について意見を収集した。 ・学生は、授業・課題等でデータ分析等を手順通りに作業として実施することはできるが、今この作業が何のための分析なのか、何を明らかにできるのかなどを理解できていない場合がある。仮説を考えてもらったり、その結論に導くためにどんな分析が必要かを考えてもらうことで、作業にならない工夫が必要である。 ・アプリケーションの機能を用いればボタン一つで分析結果がわかるが、結果を導く計算式までを理解するのは難しい。どこまでを教えるのが適切なかは悩むところである。初めは手計算で行わせるなどアプリケーションに頼らないやり方もありえるが、その分時間がかかってしまう。一方で社会で役立つ能力と割り切ると、リテラシーレベルということも鑑みると、アプリケーションはあるのだから、数式などの説明は割愛するという考え方もありえる。 基幹教育センターにおいて上記の意見等を踏まえ、プログラムの改善に活用している。
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	モデルカリキュラムリテラシーレベルの導入・基礎・心得に準じた内容を展開し、時事やトレンドなど社会での実例をもとにAIなどがどのような活用をされているのかを中心に、受講生の専門分野である経営学、法学、看護学等とも関連付けながら、好奇心を促す講義内容としている。取りあげる事例については、授業改善アンケートなどの結果を活用し、その内容について評価を実施し改善に活かしている。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること	基幹教育センターにて、授業改善アンケートの意見を参考に、学生の「分かりやすさ」の観点から講義の内容・実施方法の見直しを行っている。例えば、令和7年度からはクラスサイズを調整し「データサイエンス・AI基礎」については2クラス開講とすることで学修効果の向上を図っている。